RS
Ritsumeikan Style SPECIAL ISSUE
学園通信 Dynamic Academic 2011

RITSUMEIKAN

2011年度全学協議会特別号
スポーツ健康科学部版

「スポーツ健康コミュニティ」の創造に向けて

Ⅰ スポーツ健康科学部の誕生

スポーツ健康科学部は、2010年4月に誕生した新しい学部です。スポーツ健康科学部の誕生に至る経緯について振り返ります。

1 社会的動向

立命館大学は、社会的要請に応え、学問の発展に寄与し続けることが高等教育機関としての社会的使命であると強く認識しています。このような使命のもとで、本学は新学部・新研究科の開設など新たな教学分野を切り拓いてきました。

21世紀を迎えた今、いかに健康で豊かな暮らしを送っていくかは、人類的・国際的な課題になっています。また、人類の限界に挑戦するスポーツ競技のトップパフォーマンスを発揮するためには、最先端の科学的観点からの分析やサポートが不可欠です。さらに、スポーツや健康に関わる地域、非営利団体、企業など組織のあり方を専門的視点で分析し政策化していくことも極めて重要になっています。このような社会的要請に対応して、従来はスポーツと健康をキーワードとする「体育学」が学問分野としての役割を果たしてきましたが、課題や対象領域の多様化・深化にともない、また解決策は研究成果の共有・総合・融合により見いだされることが多いことなどから、「体育学」を基盤としつつ医学、保健衛生学、理学、工学、教育学、経済学、経営学などとの総合的・学際的な連携を深めた新しい学問分野として「スポーツ健康科学」が誕生しました。

2 立命館大学における経緯

本学におけるスポーツ健康科学分野の教学展開としては、1998年4月、BKCの複数学部から構成される文理総合インスティテュートの中に、サービス・マネジネント・インスティテュートを設置（2010年度より募集停止）するとともに、2007年4月からは産業社会学部にスポーツ社会専攻を設置しています。また、本学は1994年4月のBKC開学以降、滋賀県や草津市をはじめとした地域連携・社会連携を展開していくなかで、スポーツ健康科学分野についても、教育面、研究面、そして課外活動などさまざまな側面から、BKCを拠点とした社会的ネットワークの構築や社会連携活動を積極的に進めてきました。

このような本学における取り組みは、「1」に記載した社会的動向の中で、さらに発展させるべき重要なテーマであり、社会的要請はますます大きくなっています。

3 スポーツ健康科学部の誕生

以上「1」「2」に述べた社会的動向や本学における経緯を踏まえ、2010年4月、「スポーツ健康科学の教育研究を通じて、グローバルな視野とリーダーシップを備え、スポーツ健康科学分野への理解を持ちつつ、社会の発展に貢献する人間を育成すること」を教育理念として、スポーツ健康科学部が誕生しました。スポーツ健康科学部の誕生は、立命館学園の建学の精神（自由と清新）や教学理念（平和と民主主義）を踏まえ、立命館憲章や、学園の中期計画＜2007-2010＞に記載された事項を具体化するものでもあります。

「教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。」（立命館憲章より抜粋）
「高度成熟社会へ移行していく日本社会では、文化分野とスポーツ分野の社会生活の中で占める位置は益々強まると予測される。今後、スポーツ系を含む新たな教学分野の拡充など、さまざまな展開を重層的に検討していく。」（学園の中期計画＜2007-2010＞より抜粋）

Ⅱ スポーツ健康科学部の目指すもの

2010年4月の学部開設にあたり、上述の教育理念を実現するために、スポーツ健康科学部の教学システムやカリキュラム上の特長とした点、工夫した点などを以下に振り返ります。

1 総合性・学際性

スポーツ健康科学は、体育学、医学、保健衛生学、理学、工学、教育学、経済学、経営学などとの連携の上に成り立つ総合的・学際的な学術分野ですが、学部の設置にあたり、教育課程（カリキュラム）、教員組織、施設・設備をどのようなものにするかは極めて重要です。スポーツ健康科学部は、この総合性・学際性を、教育課程

Ⅳ 「スポーツ健康コミュニティ」の創造に向けて

スポーツ健康科学部は「スポーツ健康コミュニティ」の創造を目指しています。「Ⅱ.スポーツ健康科学部の目指すもの」を踏まえ、完成年度（1期生の卒業時期）に向けた課題、スポーツ健康科学部のさらなる発展や「スポーツ健康コミュニティ」の創造に向けた課題を以下に列挙します。

1 コース、ゼミ

スポーツ健康科学部は、学際的・総合的な学部です。その上で、1・2回生の基礎的で、総合的・学際的な学びを踏まえ、卒業に向けて学生一人ひとりが学士課程の卒業、すなわち「学士」の学位に相応しい一定の専門性を身につけることが不可欠です。この専門性を身につけるためには、3回生への進級時に選択する「コース」と「ゼミ」（専門演習Ⅰ～Ⅳ）が卒業論文作成の観点からも極めて重要です。スポーツ健康科学部の卒業要件のひとつである「卒業論文」の完成に向け、3回生からどのようなコースとゼミに所属して学習を深めていくかは、2回生後期セメスターに選択します。

2 インターンシップ/サービスラーニング

先に述べたように、スポーツ健康科学部は理論と実践を通じた履修や学生の成長を目指した学部であり、インターンシップ/サービスラーニングは、実践を深める点で重要なプログラムのひとつです。2回生からは、インターンシップやサービスラーニングが本格的に始まります。学部独自の受入先を開拓し、ひとりでも多くのみなさんが、積極的にインターンシップやサービスラーニングに参加し、理論と実践を通じた学力形成を進めることを期待します。

3 進路・就職（大学院進学を含む）

スポーツ健康科学部と同時期にスタートした大学院スポーツ健康科学研究科・修士課程は、本年度、第1期生が修了します。スポーツ健康科学部の学部生のみなさんにとっても、進路・就職は重要なテーマのひとつであり、学部としてもキャリア形成科目を開講し、また、キャリアセンターと協力してさまざまな取り組みを進めています。キャリア形成のためには、入学時から準備を進めていくことが重要ですが、2期生を迎えるまで学年進行したことを踏まえ、2回生で行うべきこと、3回生で行うべきことなど、キャリア形成に向けた具体的なプログラム、4年間のスケジュールなど学部としての基本方針について、キャリアセンターとも協力して引き続き整理・精緻化を進めていきます。

その際、大学院進学も重要な進路のひとつです。大学院スポーツ健康科学研究科・修士課程には、初年度も2年目も全国からさまざまな学生が多数入学しています。立命館大学においても、学部生の約半数が大学院へ進学する学部・学科があります。また、大学院スポーツ健康科学研究科は、よりいっそうの高度化をはかるべく、来年4月（2012年4月）から修士課程修了者がさらに研究を深めるために進学する「博士課程後期課程」を設置する準備を進めています（設置認可申請中）。大学院進学についても、学部生のみなさんと積極的な意見交換をしたいと考えます。

4 国際化

国際化は国家レベルの、また立命館大学にとっても重要なテーマのひとつです。前述したように、「スポーツ」は人類の諸活動の中で最も国際化が進んだ分野の一つであり、「健康」は人類共通のテーマです。スポーツ健康科学部としても、国際化を促進する教学プログラムの開発を進めています。スポーツ健康科学部の国際化をさらに活性化・高度化したいと考えます。

5 スポーツ施設・設備

スポーツ健康科学部における教育・研究活動を展開するためには、スポーツ施設・設備の充実も課題のひとつとなります。正課を実施するためだけのスポーツ施設でなく、カレッジスポーツなどの課外活動、滋賀県や草津市などとの地域連携・社会連携の観点、さらには日本の競技力向上の視点も含めたスポーツ施設の整備をはかることができないか、引き続き、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。

Ⅴ スポーツ健康科学部のさらなる発展

スポーツ健康科学部は、2010年4月にスタートしたばかりの新しい学部ですが、以上のようなコンセプトでさまざまな取り組みを開始しています。学部における学年進行（3期生、4期生の受け入れ）、大学院における博士課程後期課程の設置（設置認可申請中）など、さらに大きく成長・発展することを目指しています。

スポーツ健康科学部の学生、大学院生、教職員の一人ひとりが、「スポーツ健康コミュニティ」の主体的創造者です。「スポーツ健康コミュニティ」の創造に向け、学生、大学院生、教職員が引き続き協力し、それぞれの立場から積極的に、そして自主的・自律的に役割を果たしていくことを切望します。

R 立命館大学
RITSUMEIKAN

立命館大学学園通信 Ritsumeikan Style 2011年度全学協議会特別号
2011年6月13日　発行：立命館大学広報課
〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1　電話075-813-8146

Japan University Accreditation Association
ACCREDITED
2005.4~2012.3

（カリキュラム）、教員組織、施設・設備のすべての面において高いレベルで実現しています。

スポーツ健康科学部の教育課程は、基礎専門科目の内容や４コースの体系などが示す通り、総合的・学際的なものです。教員組織についても、「スポーツ」や「健康」を学問的基盤としつつ前述したさまざまな学問領域を専門とする教員で構成しており、施設・設備についてもインテグレーションコア内に、４コースに対応した施設や最新鋭の機器・設備を整備し、総合性・学際性を担保しています。

2　BKCでの展開

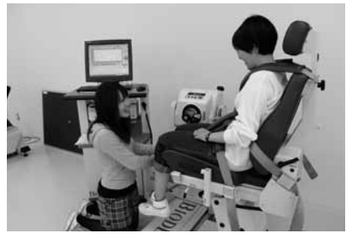
BKCには、スポーツ健康科学の隣接領域である生命科学、薬学、理工学、情報理工学、経済学、経営学などを学術分野とする学部があります。また、BKCは1994年４月の開学以降、スポーツ健康科学部が目指す、滋賀県や草津市をはじめとした地域連携や社会連携がさかんなキャンパスです。さらに、スポーツ健康科学との関連が深いカレッジスポーツの拠点のひとつでもあります。

このような観点から、スポーツ健康科学の優位性を活かすことができる環境を有したBKCにスポーツ健康科学部を設置したことは大きな意味があり、スポーツ健康科学部の特長のひとつとなっています。

3　理論と実践

スポーツ健康科学部は理論と実践による教育・研究の展開、それを通じた人材育成を目指しており、講義科目で理論を学びつつ、同時にインターンシップやサービスラーニングなどの実践プログラムを重視しています。また、「コーチング実習」区分と「身体科学実習」区分から構成される実習科目を数多く開講するとともに、インテグレーションコアの施設・設備を使用する科目も多数あります。

インターンシップ（国内・国外）・サービスラーニング（専門）、実験・実習系科目、最新鋭の施設・設備を利用する科目などによる、理論と実践を通じた教育を展開します。



4　カリキュラム

スポーツ健康科学部の設置にあたっては、過去の全学協議会で議論されてきた教学上の重要テーマなども視野に入れた検討を行い、その多くを実現しました。人材育成目標に向かって確かな学力を育成し、学士課程教育に相応しい「質」を担保する趣旨で、第１セメスターの基礎演習Ⅰから第８セメスターの専門演習Ⅳまで、４年間にわたる小集団教育を実施します。科目区分・科目小区分ごとの必修条件を細かく設定するとともに、卒業論文を必修化しています。また、単位制度の趣旨に則り、ひとつひとつの科目をきちんと履修していく趣旨で、年間受講登録の上限単位数を40単位（４回生以上は44単位）としています。

初年次教育に関わっては、基礎専門科目の中に「リテラシー科目」区分を設けてさまざまな科目を開講しています。リテラシー科目の中の「日本語表現法」、「基礎数学」、「調査方法論」、「基礎理科」は、１回生全員が受講する科目と位置付けるとともに複数クラス開講し、きめ細やかな学習指導を行っています。さらに、「日本語表現法」、「基礎数学」、「基礎理科」はグレード別のクラス編成とし、履修進度にあわせた学習を支援しています。スポーツ指導実習の各科目、パフォーマンス測定評価実習Ⅰ、同Ⅱ、解剖・生理学実習など実験・実習系科目も多数配置しています。

キャリア形成に関わっては、第２セメスターに専任教員全員が自身の専門分野や当該専門分野の専門性、進路・就職像などをリレー講義する「スポーツ健康科学セミナーⅠ」を配置するとともに、第３セメスターでは、進路・就職先として想定される各界から毎回ゲストスピーカーを招聘する「スポーツ健康科学セミナーⅡ」を開講しています。一方で、講義科目の精選を進め、カリキュラム上の重点や「学士（スポーツ健康科学）」の学位に相応しい学問上の重点を明確化しています。

スポーツ健康科学部のカリキュラムは、「学士課程（学部）ガイドライン」を全学に先駆けて実現したものとも言えます。

5　教養教育・外国語教育

総合的・学際的な学びの基礎として、また、豊かな倫理観や大学生・社会人としての使命感を持った人材を育成する趣旨で、教養科目を開講しています。立命館で学ぶことの意味を考えてほしい、卒業後も広い視野から立命館で学んだことを活かしてほしい、そのようなことを期待して「日本の近現代と立命館」、「立命館で平和を学ぶ」を受講できるカリキュラムとしています。

また、「スポーツ」は人類の諸活動の中で最も国際化が進んだ分野の一つであり、「健康」は人類共通のテーマです。外国語教育に関わっては、スポーツ健康科学分野における国際レベルの研究活動、研究交流、研究発表は英語を主要言語としていることから、スポーツ健康科学部の外国語教育は英語専修としています。スポーツ健康科学に関連した興味・関心あるテーマについて発表する「プロジェクト英語」と、プロジェクト英語に必要な英語運用能力（聴く・話す・読む・書く、文法、語彙）を修得する「スキルワークショップ」の履修を通じて、英語能力の向上をはかります。

6　資格取得

スポーツ健康科学部のカリキュラムは、中学校教諭一種免許状（保健体育）、高等学校教諭一種免許状（保健体育）、健康運動指導士、健康運動実践指導者、日本体育協会公認資格、トレーニング指導者などの資格取得を積極的に支援することを視野に入れて設計しています。（詳細は、履修要項を参照して下さい。）

Ⅲ　開設以降の取り組み

2010年４月の開設以降、「Ⅱ.スポーツ健康科学部の目指すもの」に沿い、カリキュラムや科目運営を実践しています。

その上でさらに、学部開設以降この１年間に、以下に列挙するさまざまな取り組みを実施してきました。「お互いの顔がわかる学部」「学生と教職員、学生同士が“近い”学部」、それがスポーツ健康科学部です。

1　正課科目、カリキュラム運営の工夫

新入生にとって最も重要な科目のひとつである基礎演習Ⅰでは、共通テキストを作成するとともに、クラス単位で新入生全員を対象としてMR室等で「高機能画像撮影装置を使用した学習」を、栄養調理実習室で「学部長との朝食懇談会」を実施しました。第４セメスター配当の小集団科目である研究入門Ⅱについても、共通教材の選定を開始しています。また、確かな学力を形成する趣旨で、専任教員全員がオフィスアワーを設定しました。

スポーツ健康科学部での学習は系統履修を重視しています。定期試験では、計画的な単位取得を促進する趣旨で、基礎専門科目と専門科目について、定期試験の途中退席不許可制度を定めました。また、講義の講評や成績評価の分布状況をmanabafolioで公開しています。manabafolioは、一人ひとりの学生の学習を支援するさまざまな機能を持ったWebコースツールです。スポーツ健康科学部のいくつかの科目では、当該科目の受講生と教員とのコミュニケーション促進、受講生同士のコミュニケーション促進、教員からの課題提示と学生からの課題提出などにmanabafolioを活用しています。基盤科目の中の必修科目などでは、受講生の理解を促進するために講義内容を収録してmanabafolioで公開しています。manabafolioは学生一人ひとりの提出物（成果物）や履修状況などを記録・蓄積することが可能であり、４年間のキャリア形成をサポートする「キャリアチャート」としての運用も開始しています。

2　ゼミナール大会

１回生から興味のあるテーマを調査し、レポートを作成したり発表する力を身につけることを趣旨として、2010年12月に１回生全員とスポーツ健康科学部の全教員が参加するゼミナール大会を開催しました。ゼミナール大会に向けて、基礎演習Ⅱで小グループを編成して発表準備を進め、予選を突破した12組（英語部門４組、各コース部門８組）がファイナルステージに進み、プリズムホールでスポーツ健康科学部の全学部生・全教員に向けてプレゼンテーションを行いました。第１回ゼミナール大会の最優秀賞は、英語部門:「To Expand the Trainer's Job Opportunity～Trinity of AT, PT, and Sports Doctor～」、各コース部門:「急性運動における深部末梢の酸素および温度変化」でした。

3　チームZERO、「健康運動指導士」勉強会

授業時間割に掲載された正課科目以外にも、さまざまな自主的・自律的取り組みが実施されました。週１回・早朝、副学部長のコーディネイトにより、トレーニング指導実習室で科学的トレーニング方法を実践する「チームZERO」が継続的に開催されました。また、学部長のコーディネイトにより、健康運動指導士を目指す勉強会が開催され、毎回80名を超える学生が参加しています。

4　アカデミックアドバイザー

2011年度全学協議会における主要テーマのひとつである「学びのコミュニティ」の創造・発展は、スポーツ健康科学部においても具体化が進んでいます。2011年４月から、スポーツ健康科学部の上回生が新入生の学習を支援する、アカデミックアドバイザー制度の運用を開始しました。アカデミックアドバイザーは、リテラシー科目に関わることや正課と課外活動の両立に向けたアドバイスなどを行います。この制度では、学生同士の学びあいや、回生を超えた経験交流を通じて学生が相互に成長していくことを重視しています。上回生のアカデミックアドバイザーにより、開講期間中、週２回程度の学習相談やプロジェクト発信型英語プログラムに対応した「プレゼンテーションガイダンス」などを実施しています。また、新入生オリエンテーション期間中は履修相談会も実施しました。引き続き、TA（ティーチング・アシスタント）、オリターなどとの役割分担と連携のあり方について、運用実態や学生（TA、オリター、アカデミックアドバイザーなどの学生スタッフ、ならびに一般学生）の意見なども踏まえて検討を深めつつ、スポーツ健康科学部を拠点とした「スポーツ健康コミュニティ」の創造、2011年度全学協議会の重要テーマのひとつである「学びのコミュニティ」の創造を実現していきたいと考えます。

5　FD（ファカルティ・デベロップメント）

副学部長をコーディネイターとして、毎週火曜日にスポーツ健康科学部のすべての専任教員を対象にした「ラン智タイムセミナー」を実施しました。スポーツ健康科学部には、他大学や国内外の研究機関等で教育・研究活動を行ってきた教員がたくさんいます。また、「教育学」を研究分野とする教員も在籍しています。立命館での事例報告、他大学・他研究機関での事例報告などFDの取り組みを進めました。９月には教育学分野の著名な学外講師を招いたセミナーを実施するとともに、２月には各界の識者によるミニ・シンポジウムを開催し、スポーツ健康科学部の教育目標における重要な柱のひとつである「リーダーシップ」と「コーチング」について検討を深めました。

6　その他

上述の取り組みに加えて、2010年12月には新入生全員が傍聴・質問可能な形態で、学部執行部と学部自治会執行部との「教学懇談会」を開催しました。また、学部ホームページで公開しているブログ「あいコアの星」は学部発足前の準備期間からスタートし、スポーツ健康科学部の教員が交代で投稿しています。ブログは毎日継続的に投稿が行われ、本年４月より３年目に入っています。

学生の自主的・自律的な取り組みもさかんです。４月中旬から下旬までの12日間、スポーツ健康科学部の学部生有志が、スポーツ栄養学での学びを応用・実践した「おむすび」を販売し、売上金を「東日本大震災」の義援金として日本赤十字に寄付する取り組みが行われました。この取り組みにあたり、「スポーツ栄養学」を専門分野とする専任教員、ならびに「管理栄養士」の資格を持つ大学院スポーツ健康科学研究科の複数の大学院生が学部生を積極的に支援しました。